

平成28年度第3回岡山市総合教育会議

日時：平成28年10月28日（金）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成28年度第3回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日の会議は、全員のご出席により成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

〔「お願いします」と呼ぶ者あり〕

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めてのご出席となる菅野教育長と石井教育委員から、一言頂戴いたしたいと存じます。まず、菅野教育長、お願いいたします。

○菅野教育長 皆さん、おはようございます。

山脇教育長の後任として、この9月から岡山市教育委員会教育長を拝命しております菅野和良と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

岡山市の子どもたちの幸せのために精いっぱい力を尽くしていく所存でございます。どうぞよろしく申し上げます。

○司会 ありがとうございます。石井教育委員、お願いいたします。

○石井委員 おはようございます。

本年9月1日付で教育委員会委員を拝命しました石井希典と申します。

2カ月弱が経過いたしまして、岡山市の教育に携わる皆様方の大変なご尽力の現状を肌で感じているところでございます。私自身は企業経営に携わっておりますけれども、その立場、経験を生かして、精いっぱい岡山市のために貢献ができるように努めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○司会 ありがとうございます。

それでは、協議事項に移らせていただきます。議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく申し上げます。

○市長 では、次第に沿って議事を進めます。

まず、総合教育会議の運営要綱の改正について、事務局から説明をしてください。

○事務局 それでは、資料1をご覧ください。

地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正が行われ、教育委員会の組織について、改正前は5人の委員で組織され、委員の中から教育長が任命されていましたが、改正後は教育長と4人の委員で組織することとされました。これに伴い、岡山市総合教育会議運営要綱第3条で定める会議の定足数について、2の新旧対照表にありますように、「市長及び教育長を含む3人以上の教育委員会委員」としていたものを、「市長、教育長及び2人以上の教育委員会委員」に改正しようとするものです。

なお、法の改正は、昨年4月1日から施行されましたが、教育委員会の組織については経過措置により、改正後に任命された教育長から適用されるため、このたびの要綱改正となりました。

以上でございます。

○市長 改正案のとおり決定してよろしいでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 ありがとうございます。では、改正案のとおり決定させていただきます。

次に、大綱の策定について、前回の教育会議から具体的な協議にもう入っておりますけれども、メンバーが代わっているということもございますので、具体的な協議に入る前に、前回の会議の振り返りから始めたいと思います。

資料2について、事務局から説明をお願いします。

○事務局 それでは、前回の総合教育会議の概要についてまとめております資料2をご覧ください。

前回の会議では、教育大綱の柱の案として6つの項目が示され、それぞれの項目についてご意見をいただいております。

学力の項については、学力が十分身につけていない子どもへの対策が入ったらいいのではないかといったご意見。

規範意識の項については、「たくましく生きる力」のような言葉が欲しい。

愛郷心の項については、グローバルな視点やESDの成果を生かし、世界に目を向けるといったフレーズも必要ではといったご意見。

教職員の項では、若手教員の育成の重要性。

協働の項では、地域協働学校の活動について、いいところや修正点を話し合う時期に

来ている。などのご意見をいただきました。

また、大綱全体につきましては、小・中学校の子どもたちの教育を中心に考えていくという大綱の対象についての方向性が決まり、ご意見としては、現場が混乱しないように、基本の柱を大切にしながらどう深めていくのか、具体的に示してほしい。これとこれを中心にやっていくような優先順位も必要では、などのご意見をいただいております。

以上でございます。

○市長 前回の会議では、この柱の案として、まず6つの項目が示されたところであります。それぞれ見ていただければ、全て6項目とも大事な項目だということに思いますが、ただ優先順位をつけていかなければならないという意見、これらもあったわけがございます。今後、子どもたちを教育していく上で、目標を持っていかなければならない。それも目標というのは手の届く年数といえますか、そういった中で考えていかなければならないということも言えるのではないかとこのように思います。

そういうことで、学力の向上、また問題行動への対応など、これまで議論したことに重点を置いて取り組んでいかなければならないということで、余り何でもかんでも入れるというのではなくて、重点を置きながらやっていこうじゃないかということも議論させていただいているところでございまして、ついでには教育長から学力の向上について、資料での説明とともにお考えをお聞かせいただければと思います。

○菅野教育長 それではまず、資料3というペーパーをお出しいただければと思います。

この資料3は、今市長のほうからご説明があったように、前回の会議で協議した6つの項目を踏まえて、学力の向上及び暴力行為やいじめ、不登校の防止、解決に向けて、重点を置いて取り組んでいかなければならないことを示したものでございます。

続いて、資料4でございますが、岡山市の学校教育は、日々の教育活動の充実により着実に成果を上げている部分もあります。しかし、この資料では、主に課題となることのみを取り上げ、今後の方向性につなげていこうということになりました。

全国学力・学習状況調査につきましては、小学校では改善が見られるものの、中学校においては依然として正答率が低い。また、暴力行為等についても、減少傾向にはあるものの、全国と比べるとまだまだ多いと。こうした課題につきまして、教育委員会及び学校の問題点として、資料4の左側にあるような分析を行いました。

大きく分けて5点ございます。

まず、全国調査結果の分析及び活用不足でございますが、全国学力・学習状況調査をここでは全国調査と言いかえております。学力調査は、国語と算数、国語と数学と教科が限られ、調査の内容が主として知識に関するA問題、主として活用に関するB問題のみというふうになっております。

学力と言われるものには、意欲や関心、態度、技能等も含まれますが、それはこの調査では、全国調査では調査しておりませんので、学力の中の一部のみを調査するというふうはこの全国調査を捉えておりました。目の前の子どもたちの指導が一番で、全国調査の十分な活用ができていなかったという面がございます。

2番目は、授業改善への取り組み不足であります。授業が子どもたちのためになっているのかどうかということですが、教員がお互いに授業を見合い教え合うという、切磋琢磨する機会が不足しており、また特に中学校では生徒指導や部活動に追われたり、教科担任制であったりするために、組織的な研究を進めにくいという傾向がございました。

3番目は、課題の深刻化。これは、学力も生徒指導面もそうですが、小学校ではクラスの仕事は担任だけで解決しようという傾向がございます。学校全体で取り組むという意識が低かったのではないかとこの傾向もございます。また、家庭や地域の問題点について、学校から言いにくいというケースもございます。

4番目は、社会や子どもの変化への対応力不足でございます。発達障害のある子どもなど、支援や配慮を必要とする子どもが増加しておりまして、従来どおりの指導では効果がなかなか上がらないというケースが増えております。

最後5番目は、教員の負担の増加です。何でも学校に押しつける傾向があるのではないかと。保護者や社会からの学校への多種多様な要請・要望が増加しているという面もございます。

そういった5つの視点で課題を分析いたしました。そこで右のように絶え間ない検証、変革とチャレンジをスローガンに掲げ、教育委員会の強いリーダーシップのもと、学力向上に向けた取り組みを重点とする方向性を打ち出しました。

学力向上につきましても、生徒指導課題の克服につきましても、子どもも含め教育委員会や教職員が当事者意識を持つということが大切であると考えており、そのための手だてを考えております。

それでは、主に学力の向上に向けた説明を行います。

次のページ、別紙1をご覧ください。

別紙1にあるように、全国学力・学習状況調査の効果的な活用であります。先ほど分析のところでも述べましたように、全国調査を十分活用してこなかったこと。それに伴い、経年的な把握をしてきておらず、具体的な改善策を見つけてこなかったという反省のもと、今後は子ども一人一人の学力を伸ばしていくために、全国調査を効果的に活用する必要があると考えております。そして、その方向性として、教員の姿勢、意識の改革を促し、子どもの意欲の向上を振り返りシート等を活用して行い、そして経年的な調査を行う学力アセスを考えております。学力アセスは、全国調査に加え、岡山市独自の学力調査を実施し、小4から中3までの子ども一人一人の学力を経年的に把握し、学習指導に生かすとともに、全国調査で市全体の状況も確認してまいります。

注目していきたい指標として、偏差値、無解答率、学習や生活習慣の状況などがございます。

小学校はほぼ全国平均、中学校は低い状態にございますが、無解答率はどの教科も全国平均より高く、つまり無解答が多く、また家庭学習の習慣や望ましい生活習慣が余りついていないということが言えます。したがって、これを改善していくということが大切であると思っております。

次に、別紙2をご覧ください。授業改善の推進でございます。

小・中学校おののくに特徴的な課題がございますが、授業改善に向けて教員の意識改革とその仕組みづくりを行っていく必要があると考えました。

とりもなおさず学力向上のための最大の方策は、教員の指導力向上でございます。人事やカリキュラムの作成により、小・中学校を一貫した教育の強化を実施、また中学校区で授業研究のさらなる充実を行うために、授業を見合い、教え合うような実践的な研修を活発にしております。

注目していきたい指標としまして、授業研究等の状況などですが、授業改善に向けた研修などが全国に比べ活発に行われていないという傾向がございます。また、校長の授業参観も少ない傾向にあります。これらを改善してまいりたいと考えております。

以下、参考資料として、全国学力・学習状況調査からの先ほど説明しました注目したい指標としてあげております4年間の経年変化、そしてその後には、暴力行為、不登校、いじめについての経年変化の資料もございます。これらを参考としてご覧いただければと思います。

以上で説明を終わります。

○市長 ありがとうございます。

これから数年間において重点を置いて取り組むべき事項として、学力の向上について教育長から発言をいただきました。これらについて、ご出席の皆様方からそれぞれご意見をいただければというように思います。

前回に引き続き、ご出席をいただいている岡山市中学校長会の藤井会長、そして岡山市小学校長会の薄会長、ベネッセコーポレーションの西島さん、梅田さんにもご参加いただいているところであります。

実は、この資料を出すに当たって、教育長、そして教育委員会の皆さん、あと市長部局と何回か議論を重ねました。まず我々としてやらなければならないものは何なのかという、先ほど言ったプライオリティーの議論が1つ、それからもう一つは、現状をどう捉えているのか。それを全て明らかにしようじゃないかというようなこともさせていただきました。赤裸々な数字が出ていると思います。そして、それらの対応策をどう考えていくのか。こういった点に絞って、非常に率直な見解を、私は教育委員会からいただいたものだというように思っているところであります。まだ、今後の数字自身は入っておりませんが、これらについて皆さん方のご意見を是非とも今日はお伺いをし、意見交換をさせていただきながら、大綱の作成へ進んでいければというように思っているところでございます。活発な意見をお願いいたします。

どうでしょうか。ずっとおられた方から、奥津さん、藤原さん、塩田さん、まずはどうでしょうか。

○奥津委員 当然今回のものは教育委員会の持っている課題というか、問題点に絞って、最初おっしゃったように抽出して、それに対する対応ということでまとめられたものだろうと思います。だから、逆に言うと評価すべき点とかいい点というのはあえて外しているという面があるのかなと。

その中で学力調査の結果というのが、特に小学校はかなり改善してきている、何年前より改善してきているところがあるんですけども、中学校の成績というか正答率というのがかなり低いということからすると、その点が一番問題だし、力を入れて改革というか、改善していかなければいけないところだというふうに絞っていくという方向性は賛成できるところでしょうし、是非やるべきだろうと思います。その中でいろいろと分析をして、方向性としてもいろいろ考えて出されているというところもいいと思

ます。

ただ、方向性については、しっかり、これだけでは恐らくないんだろうと思いますので、そこは議論なり、というか、この会議の中でどこまで出せるのかというところはあるかと思えますけれども、こういった方向性でいいのかどうかという点については、現場の意見等も含めてしっかり議論する必要があるのではないかなというふうに感じているところです。

○塩田委員 私も今回、現状というのが赤裸々に出てきたということは思いましたし、それは私たちが感じていたことでもあるかと思えます。学力テストとそれから学習状況調査の質問紙を見ておきますと、生活習慣といいますが、そういったところも赤裸々に出てきている。見返しますと、本当にその中でさまざまな課題をピックアップすることができたかと思えます。その活用が不十分であったというのは、反省するべき点ではないかなというふうに思っています。

こうして見返してきているんですけども、回を重ねるごとに小学校などでは改善をしてきているということで、これがまた小学校がうまくいけば、それが中学校に波及してくるというふうに考えてもおります。今洗い出しをして、現状を見て、課題を出してきて、いい方向に向かっていけばというふうに思っております。

○藤原委員 私も何年間もいじいじしたところもあったりして、どうして上がらないのかなというのが。ただ、施策的にやっていることはやっている。ただ、それが功を奏している部分と奏していないというか、まだ効果があらわれてない部分があるのかな。ただ、効果をあらわして、今後いきつつあるのは、例えばリーフレットで授業改善の中で具体的な目標、目当てであるとかまとめを入れるというのは、学校現場にかなり浸透してきて、ほとんど100%、今いっていると思います。

ただ、その質がまだ向上していないかなと。だから、そういうことを少しくローズアップしていく。あわせて状況調査の項目も、宝庫みたいな感じなんですよ、どの項目も。そのどこを切り取って、もっと深めていけばよかったのかなというのを反省しております。

例えば家庭学習のことについて、岡山はかなり少ないんですよ。これは、学校の授業がよくないのか、家庭環境がよくないのか、大人の気持ちの持ち方がまだ足りないのか。そのあたりの分析がなかなかまだできていなかったかな。

このシートの中には、もう教育委員会と学校が責任を負うというところは100%書か

れているんですが、それだけでは効果が出ないのかなと。ただ、第一義的に家庭学習につなげるためには、私たちも現場の授業を時々見せてもらうんですが、終末のまとめを終わって、45分とか50分の授業が終わった後に、家に帰って勉強したくなるんだろうか。宿題という名のもとに何かはあるにしても、次につながるのかなというのは気になるところです。だから、そういうことがここのシートに書かれるようなことはできないのかなというのを思っております。

あわせてさっきの、ちょっと言葉足らずだったところのその家庭の状況のところでは、支援ができる部分が、ここにある程度は書いておかないと、学校だけで終わりということにはならないかなという気がして見せてもらいました。

ただ、この経年変化のこれから注目すべき指標については、本当にちょっとショッキングなところもあったり、右肩下がりがずっとあったところなんかを、もう少し分析しないといけない。今日現場の先生もいらっしゃるんですが、年々状況は違うと思うんですが、傾向として大事な指標が下がっているというふうなことは、これから分析していかないといけないかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。今の藤原さんのご意見については、また最後、整理していく過程でもう少し議論させていただきたいと思いますが、石井さん、何かございますでしょうか。

○石井委員 まず、この全国調査の活用、あるいはこれを指標として利用するということを大々的にこの中心に据えるということは、教育のみならず市民の感覚というか、意識というか、注目の度合いと非常に一致していてわかりやすいという点がいい点かなというふうに感じております。

また、教育の枠を超えて、例えば今岡山に移住をするとか、そういうところというのは大事なことかと思えます。あるいは企業誘致をするというところが大事かと思えますけども、その観点で見たときに、例えば災害が少ない、あるいは犯罪が少ないといった次、同じぐらいのところで教育の環境が優れている、教育が充実しているというところが、そのよく見られている点だというふうに認識しております。そのときに何が利用されるかという、この全国調査の結果が利用されているという実情がありますので、この調査が全てを含んでないとしても、これが重要な、ほかに影響度が非常に高いという観点も踏まえて、これが大事なことかなというふうに感じております。

あと一方で、これまでの議論の議事録を拝見させていただきまして、一番下にもあり

まず教員の皆様の負担の増加。これは、数値的にも時間が延びていると、経年的に延びていると。この状況について、それぞれのものへの対応、負荷を減らすための対応が、これまでもたくさん実行されてきていると思いますけれども、それでも時間が延びているとしたら、それは、企業の社会でも今は長時間労働というのは非常に対応を求められて、皆さん一生懸命やっております。そのことは教育界でも同じことが言えるのではないかなというふうに感じておりました、この負担の増加に対する直接の対応、これが学力の現状のシートなので、ここに含めるかどうかというのは別にして、セットで示していかないと、先生方の理解を得ると、あるいは教育長がおっしゃった当事者意識というところで、しっかりとその理解をしていただくというところで、負担ばかりが増えていかないよという配慮が必要かと感じております。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

今回、学力調査の話が中心にはなっているんですけども、後ろのほうの資料に出ていますように、いじめ、暴力行為、不登校、こういったところにも一つの大きな焦点はあるわけでありますから、今回の学力がついていけばそういったところにもプラスになっていくという要素もあるでしょうし、もう少し、今の学力調査一本という視点だけじゃなくて、もうちょっと加えていったほうがいいんじゃないかなというふうに思っているというのが一つあります。

それからあと、先生のワーク・ライフ・バランス、それも重要なことだと思います。これについては、事務局のほうから何かありますか。先生の負担を軽減するということに関して、今後どういう対応をとっていくのかというのは。

○事務局(三宅審議監) 教員の負担軽減については、数年前から教育委員会から発信する調査、文書等を3割削減したり、学校の中でも努力をしていただいておりますが、昨年度から、まず子どもがいる間の先生の印刷であるとか集金業務であるというあたりをカバーする方、業務アシストという人を去年から学校に配置しております、これは学校規模に応じて、週の時間数を変えております。かなり子どもがいる間の先生方の負担は軽減、今されていると思います。

ただ、中学校では部活動、小学校では教材研究、このあたり、小学校では全教科を基本教えますので、授業研究等はかなり時間を要します。そのあたりが今、子どもが帰った後の時間として教員が残っているのが長くなっているところであります。

それから、聞き取りをいろいろする中で、特定の方が長く残っている現状がございます。特に小学校は若手の教員、この方々の教材研究の時間が延びているので、そのあたりをセンターから校内でどうカバーしていくかということ。それから、部活動は教育委員会でサポートをつけているんですが、国でも課題になっているように、部活動は若干中学校ではまだ課題として残っていると思っています。

以上です。

○市長 はい。とりあえず中学校が随分今回の議論の対象になっているので、中学校長会の藤井会長さん、お願いいたします。

○藤井中学校長会長 中学校の余り成績がよくないということと、それから中学校、いろいろな今の負担軽減の部分でもかなり負担があるということで、話が出たと思います。

中学校の校長会のほうの全体的な意見として、以前よりは随分この学力・学習状況調査についての抵抗感はなくなってきたと思います。以前は、この学力・学習調査だけが子どもたちの学力を判断するものではないというような、かなり根強い抵抗感というのがありましたけれども、ここ数年、これを真摯に受けとめて、前向きに対策を考えていかなければいけないのではないかというような意見も少しずつ増えてきて、全体の意識もそちらのほうに向かってきたと思います。

ただ、それらの具体的な手だてをどうやっていくのかというようなことで、校長会のほうもいろいろ考えているんですが、先生方の力をつけていくということと、これからの学習指導要領のことを考えると、アクティブラーニングというようなことの研修を入れていき、先生方の授業力の向上というのをまず一番に図っていかなければいけないかなということを考えているんですが、すぐに効果が上がるものではないだろうということもあると思います。しかしながら、やらなければいけない一つの重要なことではないだろうかと思っています。

それからもう一つ、部活動のことについてですが、これはもう中学校、以前からずっと抱え込んだ課題です。ただ、部活動をすることによって大きく伸びる生徒もいるので、その子どもたちが本当に伸びてくれたときに先生方は、仕事の負担感を感じるのかというと、そんなことはありません。成長して、1つでも勝って上に上がって、優勝旗を持って帰ってきたりすると、その先生方の負担感というのはそこで全て消えてしまいます。

ですから、いくら自分のクラスや自分の学年で難しい生徒、大変な親御さんを抱えて

いる生徒を担当していても、卒業式のときに「先生、ありがとう。」と一言言って卒業していったら、その3年間の負担感というのは飛んでしまいます。そんな意識で中学校の教員は仕事をしていると思います。ですから、何が負担になるかということも吟味しなければいけないんですけども、そういう報われた思いというか、そういうようなものがあると、中学校の教員はやったという心の中に一つの大きな意気を持ちながら仕事をしているのかなと、できているのかなということを感じています。

あと、細かい具体的な手だてというのは、教育委員会と協力しながら、学力アセス等もありますし、手だてを考えていかないといけないし、実際やっていかなければいけないと思います。

特に今まで中3で学力・学習状況調査の結果をしていたんですけど、中3の場合はもう卒業してしまうしというような気持ちが教員の中にもありました、正直。しかし、学力アセスを、今県では1年生をやっていますが、岡山市が1年、2年と続けてくださるならば、そのことを教員一人一人が経年変化で、1年生から3年生までの連続性で見たいけるのが、かなり大きなフィードバックではないかと考えております。

以上です。

○市長　じゃあ、とりあえず一巡のご意見をいただきたいと思いますので、小学校長会の薄会長さん、お願いします。

○薄小学校長会長　小学校校長会としましても、この学力向上、これを最重点の課題として取り組んでおります。先ほど教育長のほうから示されました資料、小学校、中学校、一貫した教育の強化ということで、岡山市の中学校区には、学びの系統表というものをつくっている中学もあります。就学前から中学校までのカリキュラム作成ということで、私どもの中学校区でも来年度、いきいき学校園づくりの3年次を迎えますので、一貫した学びの系統表を作成しようと、そういう試みをしております。そういったことが広がっていけばいいのかなと思いますし、とにかく教員の資質、能力の向上、授業力の向上ということが最前提といいますか、根底にあると思います。

授業力アップのために、とにかく授業を公開した者が得をする、そういった授業研究の場にしなければいけないと思っておりますし、担任は授業を行っているわけですけども、その授業の質がどうかというのは、なかなか判断しづらい点もありますので、管理職を中心とした授業を見て回る、また外へ向けた授業研究への参加、そういった形で取り組んでいきたいと思っております。

本年度、小学校校長会としましては、各区の授業研究の予定表を作成してもらいました。これをもとに学校長が若手教員に研究授業の参加を促す、そういった場を広げていきながら、自分を高めていけたらいいなと思っております。

将来的には授業研究の日を各区で統一して、一斉に動けるような形にしたいとおっしゃるんですけども、それについては新学習指導要領の完全実施の平成32年の頃になるのかなと思っております。もう2年後からは、道徳、それから外国語活動の先行実施に当たりますけども、授業改善をせずして学力の定着はないと考えておりますので、何としても来年度の学力調査で、徐々に順位が上がっていくことによって、ああ、やればできるんだというような自己肯定感を、教員も子どもたちも高めていければと思っております。

以上です。

○市長 はい。じゃあ西島さん、梅田さん、何かございましたらお願いします。

○ベネッセ(西島) 失礼します。ベネッセコーポレーションの西島でございます。

2点、全国調査に関してと、あと家庭に関してということでお話をさせていただきます。

まず、全国調査の根本的な目的は、P D C Aサイクルを学校でしっかり回せということだというふうに考えています。時代の変化のスピードよりも学校の変化のスピードはかなり遅いというのが、全国的な傾向です。時代はどんどん変わって行って変化して、特に企業なんかはP D C Aサイクルをどんどん回して、新しい姿に自ら生まれ変わって行く中で、学校教育の中ではまだまだP D C Aサイクルが定着していないということが大きな課題だというふうに、全国的にも言われているところです。そこに全国調査を活用してくれということがございますので、当然市民の方々からは、どうしても出てくる平均正答率が気になる場所がありますけれども、やらなければならないのは指導の変革であり、見なければならぬ最も重要な指標は学校質問紙という校長先生が答えられる、うちの学校ではこういうふうな指導をしているという質問紙があるんですが、幾つか指標にも取り上げていらっしゃるんですが、指導をどう変えるかというところをしっかりと見て、指導が変われば子どもも変わっていきますので、その根本的な点数とか数字ではなく、指導を変えるところに注目した全国テストの活用のあり方ということが大事ななというふうに思っています。

それから、先ほど藤原先生のほうから家庭のことということでお話がありましたが、

全国的な傾向としては、もちろん家庭にいろんな働きかけをされて、こうしてくれ、ああしてくれというふうなお願いをされる自治体様、教育委員会様ありますけれども、なかなか動かないというのが現実でございます。家庭もいろんな考え方が多様化しておりますし、そのような中で全国的には行政もしくは地域協働学校のような形で、コミュニティ・スクールのようなところで子どもたちが学習時間をどう確保するかと。放課後学習という言い方もされますが、あるいは土曜日のような時間をどうやって使っていくかということ、行政の方針として動かしていくというところが大分増えてきています。

ですので、質の問題、授業を変えていくというところと、学習にはどうしても量が必要ですので、その量のところでは家庭任せ、あるいは家庭にお願いをするだけではなく、行政としてどういうふうにやっていくかというところが大きな全国的な動きになっているかというふうに思っております。

以上でございます。

○ベネッセ(梅田) ベネッセコーポレーションの梅田でございます。

教育委員会様から出されておりました資料4のところにもありますけれども、教育委員会の各取り組みの狙いやポイントが、一人一人の教職員に十分に浸透していないというところがございます。

いろいろ学力向上でうまくされた教育委員会様を見ていますと、その教育委員会様でやろうとしていることを、各学校、各先生にかなり浸透させているというところがございます。逆に同じような取り組みをされても、その取り組みはあるんですけど、実際学校現場までは浸透していないというところも少なからずあります。そういった意味では、いかにその取り組みを各学校の先生方に徹底させていくかというところが一つのポイントかと思えます。

また、学力向上と、当然岡山市全体の学力というところになろうかと思えますけども、実態は十分学力のついている子どもからそうじゃない子どもと、幅広くいらっしやると思います。そういった中で、いかに個別的な視点といたしましょうか、そういうところを持ちながら、課題の大きな子どもをいかに改善していくかというところの視点なんかも重要ではないかというふうに思っております。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

一巡、意見をいただいたところですが、それぞれのご意見に対して何かございました

らお願いいたします。

じゃあ、まず私が質問という形で、藤井さんと薄さんにお話をお伺いしたいんですけども、まず藤井さんがおっしゃった中に、中学校の校長さん方、この全国の学力調査だけが学力を測る手段ではないと。だから、この調査そのものに対して、どういう表現をとられたか忘れましたけども、アレルギー的な要素を持っておられるというような話をされてたんですが、それは何か感覚的にはおっしゃっていることはわかるんですが、何なんですかね。ほかにどんなこと、全体の学力というのは一体何なのか。それはどういうふうにはかっていたのか。そしてかつ、この調査に関してどうしてそういうアレルギー、少なくとも全体像を示すものじゃないにしても、一つの調査であることは間違いないわけで、それに対してどうしてアレルギー感みたいなものが生じていたのか。そのあたりのところを教えていただければと思います。

○藤井中学校長会長 学力という言葉が先行して、学校で学習だけをやっているわけではないと。人間関係づくりとか地域との連携とか、岡山市は特に地域協働学校をやっているものですから、そういうふうな地域の人たちと生徒とのつながり、それから生徒と生徒との人間関係、そういうふうなところも生きる力というか、そういう学力の一部ではないかというような思いがあって、今までやっていたことをきちっとやっていたら、私たちは十分とまではいかないかもしれないけれども、学校教育としては一生懸命やっているんじゃないかというような意識は十分あったと思います、具体的に言えば。ですから、その一部分のペーパーだけのテストを取り出してということについての抵抗感があったんじゃないかと思います。

○市長 それは改善されつつあるというか、改善という表現がいいかどうかわかりませんが、変化しつつあるという背景は何かあるんですか。

○藤井中学校長会長 そういう根強いアレルギーはあったんですけども、近年、いいことはいんじゃないかと。だから子どもたちも点数をとればうれしいし、保護者もそれを介して、岡山市がやはりいいんかということになると、それは喜びや次の意欲につながるんじゃないかというような意見も出てきて、それなら少しそちらに軸足を置いてみようではないかというような意見がだんだん広がってきたということです。

○市長 わかりました。ありがとうございます。

あと、薄さんね。小学校のほうは、私もその順位だけじゃないとは思いますがけれども、ただ順位そのものが小学校の場合、随分よくなってきている。この背景というか、

それはどういう先生の意識の変化みたいなものは、何なのかわかりませんが、何だったんですかね。

○**薄小学校長会長** 県の順位も、昨年度が27位、今年は25位ですかね。若干、1位でも上がると非常に数字的なものに関しましてうれしい気持ちはするんですけども、小学校の場合、指導課のほうから提示されましたためあてとまとめの徹底というもの、そういった授業改善をしなければ、もうこれからはだめなんだと。知識注入の教師が引っ張っていくような授業では、これからは到底子どもたち全員の学力向上につながっていけない。どうしても現状は、優秀な子どももおりますけども、つまずいている子どももおります。そういった学力の面でつまずいている子どもをいかに上げていくか。そのあたりは校長のリーダーシップのもと、職員が授業改善、自分の授業力を向上しなければいけないという意識をいかに持つか、これは大きいことだと思いますし、それを持っていけばさらによくなるのではないかと考えております。

本校の職員の、若手なんですけども、これも学級通信を持ってまいったんですけども、彼は5年目の男性なんですけども、学級通信に「自主学習のすすめ」というものを載せて、家庭へのアピールもしていますし、3年目の1年生担任の女性教員は、授業の様子を知らせていると。文字や図で知らせるということは、それなりに自分で整理、または精査しなければいけないこともありますので、こういった点で、よりよい授業をしていくことが教師の喜びだという、やる気をいかに出させるかというところが大きいんだろうと思います。そういった点で、学校長が少しずつ意識をしているのではないかなと見ております。

○**市長** はい。皆さん方、何かございますでしょうか。

○**塩田委員** フィードバックという言葉在先ほど藤井先生おっしゃったんですけども、学力・学習状況調査をフィードバックする仕方も大切かなというふうに思います。子どもたちに返すときも、何か言葉を添えてとか、それからあと家庭、保護者の方たちがどういう状況にあるかというのを認識されるということも重要だと思うので、フィードバックの仕方の工夫ということを考えていただきたいというのが1つです。

それから、先ほど西島さんのほうから、家庭を動かすのは非常に難しいという、これは私も本当に実感をしているんですけども、絶え間ない家庭への情報発信というのは必要かなというふうに感じております。

資料の別紙1にありますような学習習慣とか生活習慣の状況というのは、これが改善

すると随分変わってくると思うんです。スマホの時間、さわっている時間が短くなれば学習時間の確保にもつながります。そのほかにも、新聞で、ここ数年間で全国的に生活習慣というのは改善しているというものを見たことがあります。それもこの質問紙から見た結果、改善しているということです。それをうまく活用することによって、少しずつ生活習慣というところにも注目をして見てみると変わってくるんじゃないか。岡山市は、多分そこら辺の解析はできていないんじゃないかなというふうに思います。学習状況調査の結果を家庭に、保護者に返すことによって、生活習慣の改善というところも見ていく必要があるのかなというふうに思いました。

以上です。

○市長 保護者になかなかうまく浸透しないという話、西島さんおっしゃったですけど、何かいい手はないですかね。

○ベネッセ(西島) そうですね。もちろん、今塩田先生がおっしゃったように、絶え間ない発信というのもあるでしょうし、あと子どもを変えてみせると言ったら変ですが、例えば荒れた学校が変わっていく姿というのがいろんな学校を拝見してきましたが、家庭に対して子どもをしつけてくれと言っても、なかなか子どもは変わらないんですね。そんなこと言ったって、うちはこれでいいんだからと言って、学校と家庭が乖離していくようなことが起こったりするんですが、学校の中でしっかり子どもたちの意識を変えていって、挨拶や掃除をきっちり指導していく中で、子どもたちが変わってきたというふうな子どもの変わる姿を保護者の方に見せる。学校側がそういう動きをしっかりとやって見せるとなると家庭が変わってくるというふうなことは見たことが、よく例として見たことがありますので、恐らく家庭に対してああしてこうしてということの前に、子どもを1回変えてみせるということが大事なのかなというふうに思います。

○藤原委員 先ほど家庭が書き切られてないなといった、その勉強しなさいというのを言うだけのイメージじゃなかったんで、先ほどから出ている子どもが安心しておられる家がないと、多分勉強までいかないだろうし、学校へ来ても落ちつかないだろうし、そういう意味での基本的なことを家庭が担うのは当然だろうと。

一方で、学校でやるのが当然なこともある。でも、そののり代の部分がどこかに書いていないと見落とされるかなという気がしました。

保護者への啓発的なことで、中学生ぐらいになると保護者はなかなか変わらないんですよね。就学前とか小学校のときは、逆に言えばクレーム的なことも多いんですよね。

子どもを通じてじゃなくて親の目線で言うと。一方で反対の角度から見れば、陶冶できるというのか、変われるというのか、多分手探りで保護者が子育てをしている中での声かけであるとか、あるべき姿はこういうふうなのがいいというのを示すのは、学校だったり、行政だったり、市全体かなという気がしています。

だから、それが安心できる場所になると、さっきのスマホのことについても親が言えたり、地域で何か一斉の取り組みができたりして、それが学力につながる一つにはなるかなと思いました。

また、先ほどの中学校校長会の先生のお話ですが、全部の雰囲気はどうかというのは離れていてわからないんですが、そのアレルギー的なところというのが、歴史的な経緯もあるかもしれないんですが、この文科省の調査が本来の目的じゃない使われ方をする、全国的に自治体が出てきたり、学校が出てきたときに、多分学校はあれではいけないと思ったのもあるんじゃないかと思います。例えば事前テストばかりをするとか、首長さんが順位のこととか何か校長への働きかけを、悪いほうのね。氏名公表であるとか、そういうネガティブなことの状況が出てきたときに、岡山の先生方は、より一層、ちょっと気持ちが離れたのかなという気がします。

だけど一方では、問題が良問であるというのは多分現場の先生方、全員知っていると思うので、てんびんにかけたときに、それでもやる価値があるんだという強い姿勢を、我々教育委員会、行政の立場としてもっと示すべきだったなというのを、今感じております。

あれだけの問題をつくるのは、もちろん大変だし、あれを分析する、そしてそれを組織力で言えば小学校はそうでもないかもしれないんですが、中学校は教科で動くことが多いので、あの問題を国語、数学の先生以外がどのぐらい解いたことがあるのか、認識があるのか。

それからもう一つ具体的なことで言えば、白紙回答の分析を、本当に岡山の子どもの力がないのか。先生方がこれは調査ということで投げかけたために、調査だからまあ少し全力投球じゃなくていいと思ったのか。本当に問題が読めないのか。気力が足りないのか。そのあたりの分析は、もっとしていかないと、結構根は深いんじゃないかなという気がしております。幾ら先生方が授業改善しても、そこに結びつくにはまだほかの手だても要るかなという感じがしました。

○石井委員 私もお伺いして、学力向上の一番の押しボタンというか、何が一番変わった

ら変わっていくのかという、そのボタンと言ったらいけないのかもしれませんが、先生方が元気で活力があって前向きに授業に取り組まれる状況、それが研究が進んでいる状況が進んでいくというところが一番だとしたときに、それがどういうふうにしてよりそうなるのか、どういうふうにしたらそこをそういう、持っていくためのその環境なのか、どういう要素があるのかなというところを、もっと深めて考えていくべきではないかというふうに感じました。

○市長 いくつか家庭の話が出ていますけれども、今岡山で話題になっているのは、一つ保育の関係なんですね。待機児童が多いという。これの最大の問題というのは、保育に対しての需要がどんどん増えているということなんですね。で、もう今認可外の保育所を除いて、保護者の40%以上、42%の人が保育所に入れたいと言っているんです。これは、今から20年ぐらい前というのは20%少しだったんですけれども、こんな勢いで増えている。これはなぜかという、一言で言うと夫婦とも働く。これはいろんな要素があります。女性としてどんどん活躍していこうという要素もあるし、また人件費が落ちて、1人の稼ぎでは食べていけないという要素もある。こんなことで、家庭というのは2人が働いていくというのは、多分これから前提になっていかざるを得ない。こういう中で、家庭の学習というのをどう考えていくのかというところというのは、大きな要素。これは多分もう欧米はずっとそういうことになっていたんだと思うんですけど、日本のその社会の変化が余りに急激なんで、例えば一定の世代は、子どもたちの親は家にいるということが前提で家庭学習と言っているし、そうじゃない人たちは、若い人たちは親はいないという前提で話になっているし、何かそういうお互いの認識のギャップみたいなものがあるような気もするんですけれども、そういう中でももちろん家庭に対して一定の発信はし続けなければならないんですけど、そういう全体の中で逆に言うと教師の占める要素というのは、もっともっと何か大きくなっているんじゃないかと。だから、西島さんがおっしゃるように、保護者を変える前に子どもを変えていかなきゃいかん。そういうような世の中になってきているんじゃないかなという気もするんですけれども、これに対してはどういうふうに、藤井さんとか薄さんはお考えでしょうか。

○藤井中学校長会長 ここに来る前に教育長さんとお話をしたんですけれども、1つの認識として、今市長さんが言われたように、社会が急激に変化してしまっていて、もう20年や30年前の私たちがちょうど採用されて教員になった時代とは全くもう様子が変わってしまっている。恐らくあと10年か20年したらもっと変わってしまうんじゃないかというよ

うな認識を持たなければいけないのかなど。そうしたときに、義務教育である小学校や中学校の先生が、仕事として捉える部分は、学力を教えるという部分もあれば、もう家庭生活にまで入り込んで、子どもたちにしつけをするという意味の部分も当然教育の中に含んでいる。だから、今西島さんが言われたように、子どもたちを変えていく。学校のほうでつくっていくというような部分の、どこか腹を決めてしまわないといけないのかなというようなことも考えたりします。

○**薄小学校長会長** なかなか難しい問題なんですけども、時代の変革のスピードに学校も乗り遅れないようにしなければいけないと思っておりますけれども、この学力の問題についても、非常にいろんなことが複雑に絡み合っていて、どこからどう手をつけていこうかという思いもあるんですが、重点化していくと。

この家庭の問題についても、子どもが変われば親も変わる。非常にそのほうが学校現場としてもやりがいがあるんですけども、好転していけばいろんなことがよいほうへ向かっていくと。

本校でも校納費の滞納は、現在ゼロです。それから、不登校も本年度なくなりました。担任のかかわりによってなくなりましたし、学校全体の環境も、掃除の時間もほぼ無言で静かに取り組めるようになりましたし、学力については低位の子どもがおりますので、そこを職員がなんとかしなきゃできないという、これは職務でもありますけれども。中学校へ送り出すしっかりした学力をつけていくということもあります。そのあたりは中学校、小学校と連携しながら、家庭学習のすすめというのを、ただ配っていても、配るだけに終わっているのを、力を合わせて改善していかなければいけないと思っております。

中学校にも非常に迷惑をかけているという思いは多々ありますので、小学校も。みんなを取り組んでいかなければいけないと思っております。

○**市長** 教育長、何かありますか。

○**菅野教育長** 自分自身が現場から来ましたから、事務職と話をさせていただくと、先ほども藤井会長が言われたように、若いときに親御さんから、まあ先生、あとは煮て食うなり焼いて食うなり好きにしてくれと。自分の子どもはもう任せるといふうに言われたときに非常にプレッシャーがあったんですね。家庭のほうからこうしてくれ、ああしてくれといふうに言われるのは、実はわりあい楽で、ああ、そのとおりにしよるやいいんじやなというのがありました。で、だんだん今は、もう煮て食うなり焼いて食うなり

好きにしてくれと言われる保護者の方は、もういません。もう皆無と言っていいと思います。もういろんなことをたくさん学校のほうに突きつけられるという現状があるということも事実です。

しかし、そういうことも含めて、岡山市が推進している地域協働学校は、保護者と学校と地域社会がしっかり一体となって連携して、子ども一人一人をしっかり育ていこうという理念のもとで動いているわけですから、時間はかかっても、そのあたり、学校だけがすることじゃない、家庭だけがすることじゃない、地域だけがすることじゃないということをしっかり出し合って、いろいろ出し合って、みんなで協力して連携していくということが、私は大切なんではないかなと、今こういう時代だからこそ改めて思っています。

したがって、社会が変われば、それぞれの箇所の責任も大きくなってくると思いますし、特に教育の分野では学校の責任というのは本当に大きくなってくる。しかし、それを教育委員会としてはしっかり支援していく。こういうふうに進めていくということ、この資料にもありますが、強いリーダーシップで各学校にいろいろと働きかけていきたいということも思っております。

○市長 ほかに何かございますでしょうか。

○奥津委員 今の家庭学習のことなんですけれども、福井で話を聞いたときに、ここは三世同居の家庭が多くて、かなり大量な宿題が出るらしいんですけれども、それでもおじいちゃん、おばあちゃんがやったのかたみいな形でいろんな、要するに家に人が、子どもを見る人がいるので、きっちりみんなできる子も多いと、家庭が多いというような話をされていた記憶があるんですけれども、ただなかなか岡山の場合は核家族も多いんで、そうじゃなくて、また家庭環境というのは非常にばらばらで、親もばらばらでと。多分一昔前に比べると全く型にはまらないというか、いろんなことが、経済もそうだし、能力もそうだし、いろんな人が多様化しているんだろうと思います。

その中で、おそらく家庭、子どもにとって家庭学習できるけれどもしない子もいる反面、なかなか貧困の問題とか、いろんな環境の面でなかなか家庭学習自体がすることが難しい子というのもある程度いるのではないかなという気がしております。

そういった意味で、家庭の環境と学力の低下というのが、ある程度データの的にも見えるようにはなってはきているはずなんだろうし、もちろん各学校ではそのあたりの問題点というのは把握されてはきているというのは当然のことだろうとは思っています。

当然先ほど西島さんもおっしゃったように、行政とかコミュニティ・スクールの重要性というのがあっていましたように、要するにそういったサポートが必要な子というのがある程度全体的というか、ある程度ピンポイントというか、問題のあるところにはそういった面でのサポートというのが必要になってきているのかなと。

もちろん子どもと親だけで何となく、確かに子どもが変わって、親も変わってというのは理想的ですし、そうになっていけばいいんだろうと思うんですけども、そこまでの力のない家庭というのがあるのかなという気がしていますので、そういったところ向けのトータルなというよりはある程度問題のあるところに焦点を当てたような形での対策をやっていけばいいのではないかなというふうに思います。

○ベネッセ(西島) 今年の学力全国調査の結果がそうだからというわけではないんですが、これは個人的な私の子どもの、岡山市の小学校、中学校でお世話になった経験も踏まえて考えると、中学校での指導の厳しさというのは、変な厳しさじゃないんですが、ちゃんとやろうという厳しさですとか、あるいは職場体験とかも行っていますが、キャリア教育といったら変ですが、学校に通うことが自分の将来にとって大事なんだというふうな気持ちの高め方とか、その辺が何か、小学校は小さいですので素直に学校に向いていくのかもしれませんが、中学校におけるそういった何かかちっとしたほうがいい、やり抜く厳しさみたいなところが何か余り感じられなかったんですね。私の子どもが通っている学校だけかもしれませんが。

あとコミュニティ・スクールも、これは地域によると思うんですが、しっかりやっていらっしゃる地域もあると思うんですが、全般的には一応名前は地域協働学校ですと言っているんですが、じゃあ具体的に子どもにとってどんなことができるのかということころは、まだまだ大きな改善の余地があるように思うんです。何にしてもやり抜くとか、やり切るというところが、何か足りないような気が、外から見ています。そこは教育委員会様や校長先生のリーダーシップでやり抜くんだというふうなところが強く押し出されている自治体さんはすごいですね。名前を上げて恐縮ですが、品川区さんなんかは、先生方から見るといろんな見方はありますが、変革力ですとかやり抜く力ですとか、そういうところはかなり強いですので、どんどん学校が変わっていく、子どもたちが変わっていくようなところが、実際できているんですけども、そういったところが岡山市様は少し、恐縮ですけども、さあ、変えるぞとか、やり抜くぞというところが弱いようにどうしても感じています。

○市長 今の点に対して、藤井さんとか教育長、何かございましたら。

○藤井中学校長会長 やり抜くということについてですけれども、岡山市は今、先ほど地域協働学校のことを教育長さんが言われたんですが、校長会のというか、私個人のもありますけど、感覚として、最初に指定を受けたのはもう大分前になるんですが、岡輝中学校区で指定を受けて、それを全体に広めていったと思います。

そのときに、岡輝中学校区には非常に大きな課題がありました。もう解決しなければどうにもならないような大きな課題があって、それをその地域協働学校というか、コミュニティ・スクールという形で解決しようという目的で、みんなが力を一つに集中したと思います。それが広がっていったときに、それぞれの中学校区で、どうしてもここはやり抜かなければいけないというような課題があったのかなというようなところを、もう一遍掘り下げて考えてみなければいけないのかなと。それぞれの中学校区で、ここは学力だと、うちは学力だと、うちは生活習慣だというような、最後までやり抜く大きな目標を持ったところが成果をおさめていくということを思います。

岡輝中学校区も、最初は暴力行為とか、それからいろいろな問題、その他たくさん問題がありまして、コミュニティ・スクールで解決をして、学校だけではなくて地域の力もかりてやろうとしました。しかしながら、その次は何を持ってきたかという、共同学習で、子どもたちが学習をする、学力をつけることで子どもたちに喜びを返していくという方向にやはり。1つ問題を解いたら次の目標にということ、切りかえて今やっていると思います。

幾らか年月がたつので、最初の目標ではなく、次の目標は何だろうとか、次は何を目標にやらなければいけないのかというようなことをもう一度検証し直すと、岡山市の地域協働学校というか、コミュニティ・スクールは、非常にもっと進んで深まりのあるものになっていくのかなというような気がします。

以上です。

○ベネッセ(西島) 一言だけ。P D C Aサイクルかな、そこもというふうに感じました。

○市長 今の西島さんの指摘というのは、非常に大きいというふうに私は思うんですけども、藤井さんの話は伺いました。非常によく理解できますけど、何か今の指摘で教育長、教育委員会のほうで何かコメントすることがありますか。

○事務局(岡林指導課長) 先ほどのやり抜くというところは、非常に私も重く考えさせていただいたところですが、地域協働学校でいろんな取り組み、地域と家庭とが協力しな

がらやっているというふうなところがいろんなところで進んでいます。

実は、ここにはいいことは載せてないんですけども、地域協働学校の一つの成果として、1つだけ中学校の指標をお示ししようと思うんですが、中学生が地域でボランティア活動をやった経験があるかというふうな質問があります。岡山市の中学生は、全国よりも約15ポイント高いという結果が出ております。これはこれまでの地域協働学校の取り組みの一つの成果ではないかなというふうに思っています。

ただ、課題が大変多いのでやり抜くというところで申し上げますと、学習状況調査で改善をすべきものがたくさんあります。そこに注目をして改善を図っていきたい。そうしたことを通してやり抜くという力というふうなものも、学校や子どもたちに考えていただきたいというふうなことを、今考えています。

○市長 ほかに何かありますか。

○塩田委員 やり抜く力とか地域協働学校というところにおいて、地域協働で地域にやってもらうことと学校でやれることというのを、すみ分けをしてもいいのかなというふうにお話を聞きながら思いました。

学校では先生と生徒の関係があって、なかなか言えないようなことを地域の方たちにお願ひする。規範意識の向上については、地域の皆さんにそういったところをお願ひしてみるとか、そういう役割分担みたいなことを図ってもいいのかなというのを少し感じました。

○石井委員 直接関係ないのかもしれませんが、企業でも今起こっていることは、本当にやりたい、売り上げを伸ばす、利益を伸ばすということの前の段階のコンプライアンスの対応というのには、本当に手をやいております。それは何かというと、安全のこと、品質のこと、長時間労働のこと、多様性への対応ということ、この部分でこぼってしまうと、もう本当のその競争に土台に上がれないという状況になっていまして、ここに企業は本当に一生懸命取り組んで、そこでやり抜いて、危機から脱して自信をつけて、本来の目的の売り上げを伸ばす、利益を伸ばすというところに挑戦をしているところで、それと似たようなことがそれぞれの学校でいろんな形となっている、コンプライアンスという言葉が適切かわかりませんが、いろんな問題が発生していて、そこをきちっとそれぞれの学校によって違うと思うんですけども、対応がきちっと進まない次のステップには進めないように思えました。

○市長 規範意識ということですよ。規範意識をどう持っていくのか。

これは、次回、問題行動等々の議論をさせていただくんで、今石井さんのおっしゃった点については、分析は事務局で、次、していくようになりますよね。はい。じゃあ、次の場でまた議論させていただきたいと思います。

○藤原委員 先ほどから子どもを変えるとか、子どもが変わるとかの、そのサポートの一つとして、さっき市長さんが言われた、多分保育園のニーズが高まって、今後も減ることはないかもしれないですね。

その次は、小学校に行くとか放課後児童クラブなんですよ。

○市長 そうですね。

○藤原委員 だから、その質をどういうふうにするのか、サポートをどういうふうにするのかで、子どもは随分変わってくるんじゃないかと思います。

だから、家庭に全部丸投げを、これも今の多様化の中では難しい。でも、一番の居場所は家庭である。だけど、その時間が少なくなっているということは、学校にいる間の時間で何とかする。そして、共働きの人が増えたら必然的に放課後児童クラブを使う人が多くなる。その、今でも多分頑張っておられるけど、さらに学習をどういうふうに果たしていくかというふうなことも一つあるんじゃないかなと思いました。

もう一つ、学校支援ボランティアが大分定着してきて、放課後の学習支援に随分絡んでくださっている学生さんたちもいます。だから、そういう方たちの力を、去年あたりから大分方向は変わってきたと思うんですが、もっともっと活用して、学校がその子たちのサポートをするところの受け皿を提供してあげられるようなことができれば、随分違ってくるのかなというのを、今感じました。

それから、岡山らしさでいうところの地域協働学校であるとか、それから岡山っ子育成条例には4者の責務を書いています。これは石井さんが入っておられる企業のほうのベースになるところも活用させてもらったりして、そのキャリア教育も形の上だけのキャリア教育だったら、その気にならない、将来展望が開けないというところで、多分学習に向かう意欲も余り変わらないかもしれないので、焦点化するのも必要だし、今のをもう少し、もう一回4者のことを考えて、最終的に子どもたちの学力に行くようなことも考えないといけないのかなと思いました。

○市長 放課後の児童学校でしたっけ。4年から6年にまた、1年から3年だけじゃなくて増えましたよね。それで、いろんな施設基準もあり、いろんな体制整備があると。

もう保育所を含めて、行政も需要に対応できてない。必死でついていこうとしている

というのが今の実情なんだろうなというように思います。そういう面では、先ほど言った環境の変化というのが猛烈に動いている中で、いろんなことを総合的にやっていかなきゃいかんということなんだろうなというように思いますよね。

ほかに何かございますか。よろしいですか。

では、次回は大綱に向けて、問題行動を中心として整理をしていただくということになるんだろうと思うんですけど。

○事務局 はい。

○市長 確かにてんこ盛りがだめだと、優先順位をつけてやる。優先順位の項目として、こういったことを選んでる。そういう面では、教育委員会、反省すべきところは反省しようじゃないかという姿勢がすごいよくあらわれていると、私は思います。これはもう一回各委員の皆さん方も目を通していただいて、次回のとあわせて議論していただければと思うんですが、それにしてもこのバックグラウンドというかね、こうなった背景とか、先ほど岡林さんですか、おっしゃった、いいこともいろいろやっているじゃないかという類の話というのは全く抜けているところもあって、いいことって一体何なんだという、例えば今の時代背景みたいなものがありますよね。先ほど言った核家族化の問題にしる、共稼ぎの問題にしるいろんな、グローバル化もあるかもしれない。そういったものを整理して、我々としてこんな感じでやってきたと。で、今緊急にやらなきゃいけないものは、そういうバックグラウンドの背景から見て、これとこれなんだと、こういう何というか、そういう整理をしといてもらったほうがいいような気がするんですけど。

我々はどういうその時代の中に今いるんだと。そういう時代の中において、今までこんなことをやってきて、よかったこともあるよねと。ただ、うまくいってないところもこういうところがあるんで、うまくいってないところは当面こういうふうにはやっていこうじゃないかと、こんな論理なのかなというふうに思ったんですけどね。

で、その中で2つの点を大きく取り上げていく。先ほど石井さんが言われたような、これをやるときには先生のワーク・ライフ・バランスをどうするんだみたいな話もあるだろうし、そういったところから派生するような幾つかの問題も記述しなきゃいかんところがあるのかなとも思ったんですが。

どうでしょうか。何かご意見ありますか。

○菅野教育長 今市長からご指摘があったことですが、今日私が話をしましたのは、基本

的には学校が、教育委員会が、主に課題となるところを出しています。それで、今市長さんご指摘のように、もうおそらく学力向上のためには、それだけではもう当然ないわけで、いろんな家庭環境のことも当然ですし、先ほど言われた社会の変化もものすごく大きな影響力があると思います。そういったことも、要は学力を向上させるために反省をしていく中で、そのほかにもこういうところは改善していかないといけないということをしっかり分析して、今後も学力向上ということを中心に据えて分析していくということで頑張っていきたいというふうに思います。

○市長 はい。そのときには、学力向上というのはもちろんなんですが、先ほど藤井さんがおっしゃったように、人間として成長させるという要素も必要なんで、教育というのは総合力のアップを目指すわけでしょうから、そういう視点も忘れちゃいけないような気がしますね。

あとは、何ができるかというところは、何でもかんでもやりゃあいいというものでもないでしょうし、教育委員会として引っ張っていくものというのは、こういうものを取りあえず引っ張っていくんだというのは必要な気がするんですけど。

じゃあ、今回は、問題行動等への対応を中心としてご意見をいただくとともに、今日いただいた意見を踏まえて、大綱の原形づくりをさせていただきたいというように思います。

そんなことで、よろしく願いをいたします。

では、本日の協議はこれまでといたします。事務局に進行を戻します。

○司会 ありがとうございます。

なお、このたびお手元にお配りしております資料の最後に、平成28年8月に文部科学省が発表した次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめということで、ベネッセコーポレーション様にまとめていただいた参考資料を添付しております。

次回の会議については、また改めて通知をさせていただきます。

以上で平成28年度第3回岡山市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。